

14.5-139
1200501214604

14.5
139

東京帝室博物館講演集 第6冊
支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念 (上田英輔)
支那陶磁の色と模様について (奥田誠一)
国立国会図書館



始



叢書 B
36
三九四九

東京帝室博物館講演集

第六册

支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念

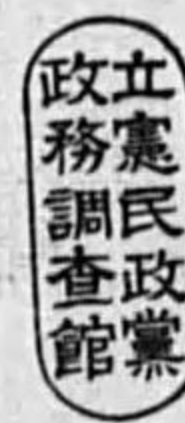
ドクター・オブ・フィロソフィ

上田恭輔

支那陶磁の色と模様について

國寶保存會委員

奥田誠一



10. 7. 8

叢書 B
36

表B
3

東京帝室博物館講演集

第六册

14.5
139x

本冊は本館講演會に
於ける速記を輯録せ
るものなり



81W24420

目次

支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念……ドクター・オブ・フイロンフイ 上田恭輔……一

支那陶磁の色と模様について……國寶保存會委員 奥田誠一……四



代時唐 壺首鳳 寶國前
贈寄氏輔民河橫

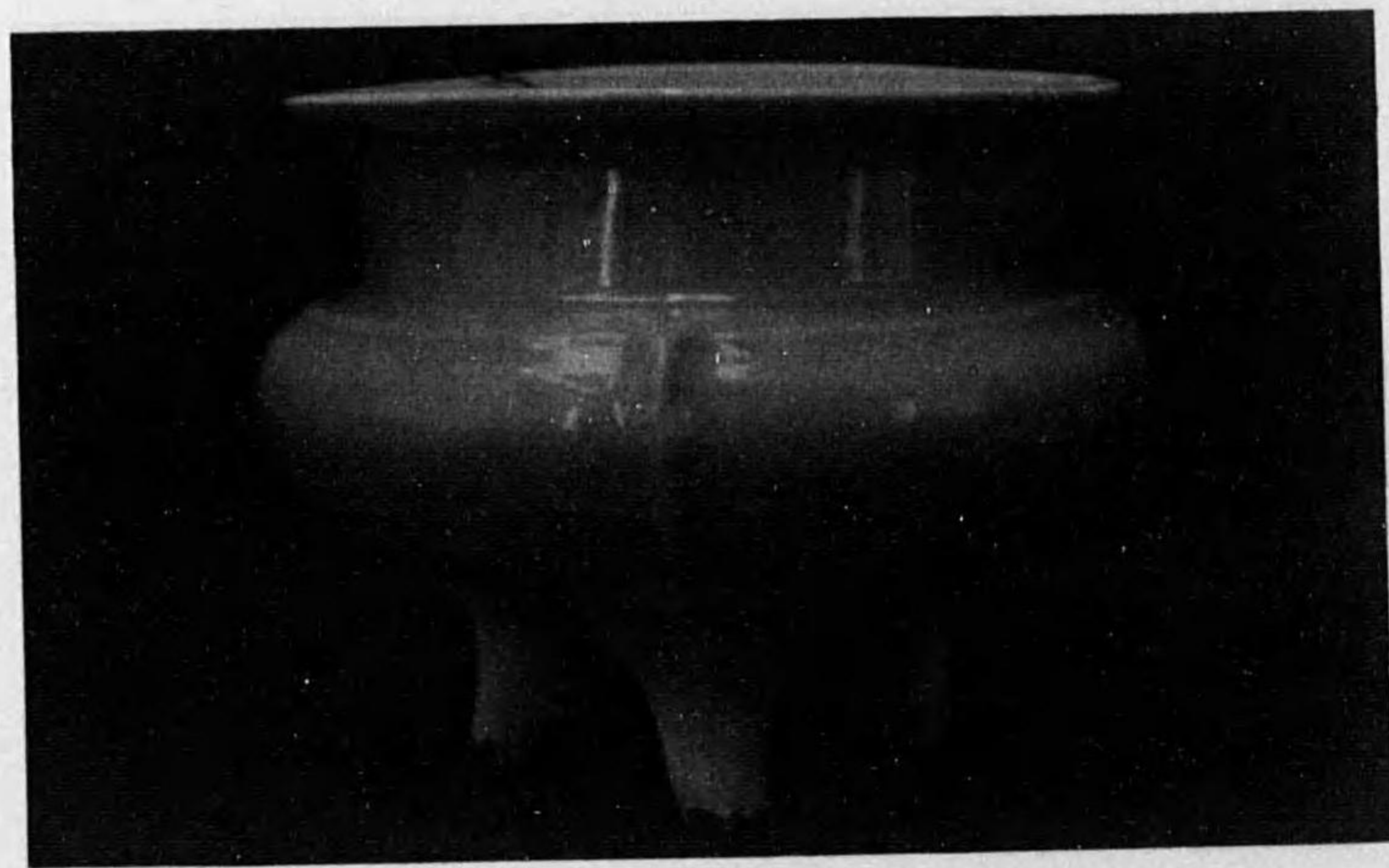
此壺首鳳之形，乃唐以前所無，蓋唐以前之壺，其首皆圓，而此壺首則作鳳首，其口微張，其目亦微開，其尾亦微翹，其形甚奇，其色亦甚古，其質亦甚堅，其聲亦甚清，其用亦甚廣，其價亦甚昂，其名亦甚貴，其德亦甚高，其功亦甚偉，其業亦甚盛，其運亦甚長，其壽亦甚久，其福亦甚多，其樂亦甚美，其善亦甚大，其德亦甚高，其功亦甚偉，其業亦甚盛，其運亦甚長，其壽亦甚久，其福亦甚多，其樂亦甚美，其善亦甚大。



代時唐 瓶耳龍彩三 寶國前
贈寄氏輔民河橫



窯官宋 爐香丹牡浮磁青 寶國
藏寺阿銀 利足



窯官宋 爐香腰袴磁青
藏寺覺圓 倉錄

支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念

ドクター・オブ・フィロソフィ 上 田 恭 輔

御承知のことと存じますが、私の演題は、支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念と云ふことになつて居ります。支那陶磁は従來歐米人の間では東洋獨特の美術として取扱れて來て居り、歐米の博物館に參りましても、支那陶磁は最も町重なる待遇を受け、その陳列室及び棚の如きも、他の美術品よりは餘程大事に取扱はれて居るのであります。併し私自身の考では、支那の陶磁は純正科學の上から申して、果して之を美術と云ふべきか否かが問題で、今日の帝展の第四部に陳列すべきものか否やが私の疑問とする所であり、何故かと申しますと、美學上の定義から申すならば、苟も美術なるものは、その作品には作者の個性の表現がなくてはならぬと同時にオリヂナリテイがなくてはならぬものであつて、若し同じやうなものが千も二千もある場合に、果してそれを美術と云ふべきかを疑ふのであります。所が支那の陶磁になりますと、是は極端なる合作であり、同時に多量生産であります。既に横河コレクションの國寶を御覽でせうが、あの乾隆時代の、日本で錦手と申す美しい焼物の花瓶の如きは、それが出來上るまでには、怖らく數千人の人手が

掛つて居り、之を陶土から器物に焼上げるまでの経路を考へると或は何千人の手を経て居るかも知れない。而もそれは一品を焼くのではなく、一時に非常に澤山拵へるのであります。假令それが皇室用の御物を焼くとしても、その数は千や二千ではなかつたらうと思ひます。この點が支那の陶磁と日本の名工の作つた所のものと違ふ所である。極端なことを申しますと、古來日本の茶人が非常に珍重される繪高麗の如き、或は天目の如き、近頃流行り出した均窯の如き、或は明朝の天龍寺手の青磁の如きは莫大なる多量生産であり、同時に日用品であり、雜器であつて、決して美術品ではない。その一例として、日本で一時期一碗千圓も萬圓もしました玳瑁天目の類も、ちやうど十五六年前でございまして、私共が河南を旅行しました時に、どう云ふ譯か二千何百箇と云ふものが山積みになつて發掘されたことがあります。その中には喰つ着いたものや、ゆがんだものや、色々ありましたが、その當時の相場は一碗二圓平均でありましたから十四五買ひました。今日まで残して置いたならば私も大に成金になつて居つたでせうが、皆人に呉れて仕舞ひました。それから青磁の如きも、先年英吉利のアレンビー元帥の率ひられた一部隊が小亞細亞のスマナで青磁のマーケットであつたかも知れぬと言はれたほどに非常に澤山な青磁を發掘したことがあります、その中には支那歴代の凡ゆる青磁がありました、主として天龍寺手の明朝物が多かつたやうであります。上古小亞細亞邊へ支那から参りますには、多分印

度洋を越えて波斯灣から入り込んだのでありませうが、スマナの様な偏地にすらも右の如く非常に多數の支那青磁が輸出されてゐた。また土耳其の皇室にも随分澤山な青磁があつた。又私の知人の英吉利人で曾て阿弗利加で總督をして居られた御方は、先達て此方へ特使が参りましたアビシニア即ちエチオピアのモザンビックで澤山な青磁の標本を集められたことがあつて、その中には今日英吉利の牛津大學で國寶的に取扱はれて居る大きな井と同系の青磁鉢もあつたさうであります。さう云ふ具合に歐羅巴から阿弗利加邊りまでもどしどし輸出された位に青磁は多量生産品であつた。この點から言ひますと、今日私共が便所で見ると朝顔位までに廣い範圍に焼成されたかも知れない。ところがこの雜器が日本には餘り來なかつたから珍重されたのであります。兎に角支那の焼物の大部分は非常なる分業的合作の多量生産であるから、之に美術の定義を下すには聊か躊躇すべきものと私は思ひます。

斯様な事情から考へると、從來我が焼物界に唱へられて居ります所の、五良大夫祥瑞が支那に渡つて立派な染付を習つたとか、瀬戸の陶祖が支那の何處かへ行つてあの茶入の如き焼物を學んで來たと云ふ傳説は眉唾物でなからうかとの疑問が起ります。支那に渡り上海から蘇州に参りまして、太湖の向ふ側に宜興と云ふ所があり、一名を蜀山とも申しまして、四川省の風景に似た山水明媚の地があります。其處で皆さん御承知の朱泥紫

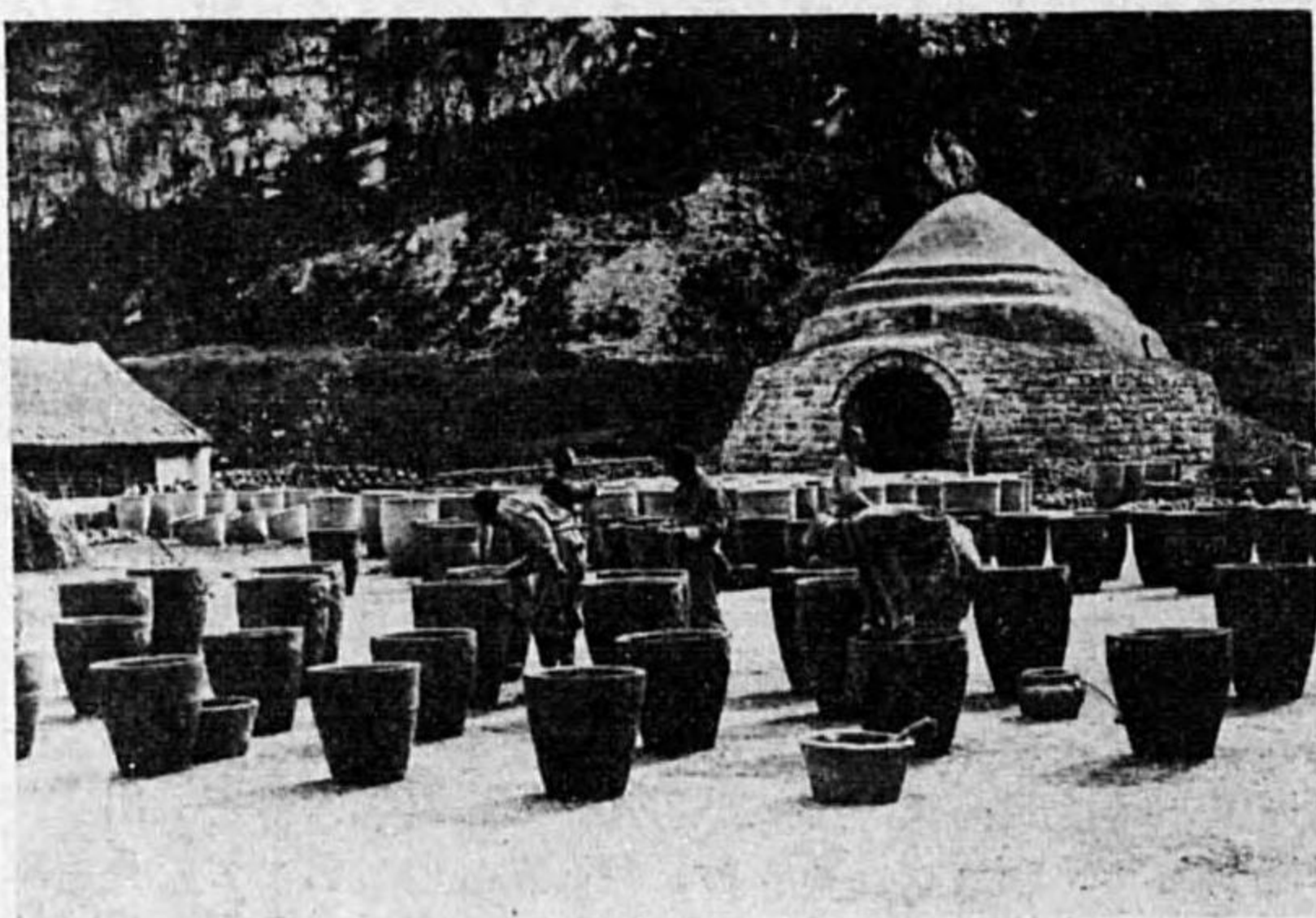
支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念
泥、紅泥、白泥と色々な五色の土が出ますが、あの地方に行つて樂焼風の陶器を學んで來た

四



捲上げの業工の程

薪屋、土は土の専門、轆轤は轆轤ばかり、型を造るものは型ばかりやつて居る。殊に甚しい



燒成前の仕上げ工程

に雜器として澤山あるのであります。それは膏藥を入れたり薬味を入れたり、主として

支那陶磁の妙所と之が鑑賞上の概念

五

のは、あの美しい錦手を作るのに、上繪師は赤は赤だけ、紫は紫だけ、黄は黄だけ畫いて居る。斯う云ふ風な細かい分業になつて居りますから、假令染付に致しましても、一個人が飛込んで行つた所で分る譯はない。祥瑞手の染付と申すものは器物本位から申しますれば、あの染付は支那の嘉靖の末年に流行した染付で、主として織物の模様を中心としてその間に色々な模様を配合した極く精巧なものであります。さう云ふものが不意に外國人が飛込んで行つて、言葉も分らず地理も分らないので、而も二年や三年の間に覚えられ様管がないのであります。から、祥瑞傳説も餘程考へもんだらうと思ひます。又瀬戸の陶祖が茶入のやうなものを研究して來られたと云ふことも一思案を要する事柄である。蓋しあゝ云ふ流儀の燒物は支那至る所

藥壺が多い。船で遠洋航海をする舟乗の多い地方にはこの手のものが澤山ある。和蘭人の日記にも書いてあります。東洋を航海する時には臺灣海峡をよく注意しなければならぬ。此處へ行くと海賊が出る、ざりとて日本の海賊ならば命には別状ない、彼は甚だ變な奴で藥味入や飯食茶碗などを無暗に探す、然し中々凄い奴で、だん、びらを持つて飛込んで来るから物騒でたまらぬと言ふ様なことがありますが、斯くして昔は茶入やその他の茶器を漁つたものでせう。私の友人に茶人がありまして、非常によく焼物の分る人で、私も信じ本人も自慢でありましたが、其男が或る所で五十圓で以て小さな茶入のやうなものを買つて来たところ、奥さんが斯んなものなら自家にもありますと云ふと、否や斯う云ふ宜いものがさうあるものか、あるなら出して見せろと云ふので、奥さんが出して來られたのを見ると確かに瓜二ツである、聊か不思議に思はれて是はどうしたのだと糺ねると、一昨年長崎の誰かが雲丹を入れて持つて來たのですと言はれて啓いた口が閉がらなかつた話がある。こんな風に足利末期から多く雜器が茶入になつて居る。茶人の好まれる御茶碗、魚屋の茶碗にしてもイラボにしても、井戸に致しまして、多くは土百姓や漁夫の飯を食ふ、極く粗末なもので、怖らくは今でも同じものを作つて居ります。朝鮮の方は知りませぬが、南支那を歩きますと、ああ云ふ雜器は澤山ある、一碗二三錢位のものでせうか。大底技術の下手な者が作りますからあの通り凸凹になります。それを茶人が色

々の名を着けて、約束だとか何だとかと勿體振つて御使ひになるのである。陶技の方から、或は焼物の研究方面から申しますと、甚だ滑稽なこともございます。併し世の中の一一般の學問もとかくさう云ふ風に出來て居り、スペンサーが教育論で申しました如くに、國語があつて後に文典が出來たのであつて、文典があつて國語が出來たのではない。それで抹茶の茶碗なんかも、御茶人の前では失禮でございますが、私は茶碗があつての約束だと思ひます。

さりながら、前述の如く斯様に多量生産の雜器に致しましても、外國の陶工が如何に名人であつても到底真似られないものが支那の陶磁にはある。何故かと云ふと、泥を捏ねる者は先祖代々泥を捏ねて居りますから、知らず／＼以心傳心でその妙術が傳つて居る。今日我國には獨乙式の色々な機械が出來て、土を濾すにも何をすることも立派な道具が名古屋邊りで使用されて居りますが、支那人のやつて居るのを見て居ると、泥を捏ねて或る程度になるとちよつとなめて見る、それでちやんとその適度が分るらしい。釉藥の調合でも怖らくそれと同様であります。窯でもその流儀である。文明國ではゼーゲル雖の何番を入れて先が曲れば攝氏の何度だと言つて非常にむづかしいことをして居りますが、支那では乞食同様の汚ない男が窯の穴を窺いて火加減の様子を見て「よし」と言つて窯の焚口に蓋をさせる。さう云ふ風に極く無雜作にやる支那の焼物の方が餘程上手に

出来上る。是は容易に得られない技術です。怖らく何千年來代々傳つて來た所の秘術であります。さうしてさう云ふ何人かの妙技が合流して完全に出来上つたものが今日世の中に残つて居る焼物でありますから、是は如何なる雜器と雖も個人が拵へた美術品よりは遙かに結構な筈だと思ひます。轆轤の使ひ方でもさうで、日本人のやうに物差しで計るやうなことはしないで、それは極く無雜作にほつくとやつて、それで一分一厘の違ひもない。斯う云ふ點が容易に得られない技術で、又支那陶磁の妙所である。

支那の陶磁の中でも殊に官窯と申しまして朝廷の御用品を焼く窯があります。是は記録にもあります如く、千の中より十を取るとありまして、製品が千個出来ればその中から良いものを十だけ取つて後は打ち壊せと云ふ命令である。所が昔から支那には狡い奴が多いから、いつも密つそり何處かへ始末を着けたと見えて、官窯の作品が今日でも相當の数が残つて居ります。是はよくいけなものの外は破らないで然るべく處分したものだと思はれます。兎に角御用品として作られたものでありますから、非常に結構なもので、殊に横河コレクションの如きは、その中でも最も良いものが残つて居るのであります。

かゝる次第で萬一皆様の中で若し焼物本職のお方が居られるならば、苦心慘憺をなされて支那の雜器や日用品を御拵へになるのは、甚だ愚の骨張とは申しませぬが、徒勞では

ないかと思ふ。繪高麗の如き、青磁の如き、或はその他の支那の雜器に類したものを、辛苦して何も彼も一人でなさるから従つて値段も高くなる。三越の展覽會などへ行つて見ますと、百圓とか百五十圓と正札の著いて居る焼物は、昔の支那人が雜器として作つた、一碗二三十錢のものより餘り結構なものはないと思ひます。あれだけの腕を有つて御居でになる日本の陶工ならば、成るべくなら支那人の出来ないやうなものを作つて頂きたい。詰り雜器の眞似なんかさらない方が宜いと私は思つて居るのであります。私は當今の日本の陶工が御やりになりますれば支那人を凌駕すべきものは染付であると思ふ。私は二十年程前に北京で買った水注を一つ有つて居りますが、道具屋は萬曆の染付だと頑張つた品物であります。所が此品には底にチャーインと九谷と書いてあつたのであります。幾らだと言つたら、五十圓とか何とか言つて居りましたが、二圓で買ひました。それは生地から言ひましても、藍の色から言ひましても、模様から見ても、支那人が自分の國のものとするのは無理ではない。現今染付は支那人より日本人の方が遙かに巧い。殊に九谷は宜いと思ひます。昨今の有田の染付は少々趣が支那とは違ひます。此處に持つて參りました破片は康熙だと思ひますが、斯う云ふものも日本の陶工は立派に出来ると思ひます。

それから茶人は、茶碗は朝鮮に限ると云ふやうな定義を下して御居でになる方があり

ますが、是は朝鮮人は元來支那のものを多く真似たのでありまして、本家は支那であります。朝鮮は今日殆ど本窯などは残つて居りませぬにもせよ、鷄龍山邊りの發掘物が非常に高値を呼んで居るのが私は不思議に思ふのです。あんなものは支那には今でも至る所で焼いて居ります。あ、云ふ雜器は一錢で一碗を呉れるやうなもので、南支那で多く焼いて居ります。かゝる二束三文のものを持つて來れば、立派に茶人の御註文の約束に叶つたで、こぼこがありますから、茶碗は朝鮮に限ると云ふやうな議論も考へものだと思ひます。

それから俗に言ふ南蠻でございます。南蠻と云ふものは土器でありますが、堅メ焼になつて居ります。是は南支那各地で澤山發掘され、支那人は漢^{ハン}瓷と言つて居りながら少しも尊重せず、極く安いもので、何に使ひましたか知りませぬが、水注のやうなものもあれば、花瓶になるやうなものもあり、頸の長い壺の類もあります。それからずつと細長い筒のやうなものもあります。斯う云ふものを徳川時代の名工がわざ／＼苦心して拵へて居りますが、土が違ふので本當の南蠻になつて居るものは極く少うございます。是は私の所藏品で一種の南蠻ですが、非常にプレミティブなもので、轆轤を用ひないで篋で削つて拵へたものです。是も私の有つて居るもので、非常に大きいものです。たぶん轆轤のない時代のものでありまして、斯う云ふことは容易に出來ませぬから、篋の内と外を泥

で壓へて焼いたものと見えまして、篋の目がちやんと内外に出て居ります。現在寧波邊りの大きな帆船が印度洋邊りに出て行く時には、是位の大きさの瓶からこの五倍位の瓶に飲料水を持つて行きますが、それが大底篋目になつて居ります。この破片は北京の南門の城壁を壊しました時に出たのですが、他



篋の細工の南蠻手土器

分極く粗末な壺であつたらうと思ひます。是は外は篋目、内は布目で焼くと布と篋は取れて仕舞ひます。しかし支那には何千年の昔に我々の祖先がやつた通りの焼方を今でもやつて居る所もございます。さりとて今の文明の時代に於て日本の陶工が南蠻風のものをお焼になると云ふことも餘程考へもんだらうと思ふのでございます。

以前、西洋人が支那の陶磁を鑑賞し始めました頃は、私共の趣味から申せば餘り有り難くない美しいものばかりに注目したもので、錦手或は赤繪のやうなものを多く珍重いたしました。私の學生の時代に歐米の博物

館に行きましても、色彩の綺麗なものばかりを列べてありました。これがツイ近頃になつてモノクロム所謂青磁の如き、天目の如き、或は辰砂、黄南京のやうな單彩ものを好み出



龍目南蠻の手大水瓶

しました。最初は千九百十六年の紐育のメトロポリタン博物館の東洋美術主任のライツと云ふ人によつて唱道され、この人が「支那古陶」と云ふ本を出しました。さうしてこの時より漢時代から宋代の我々の趣味に叶ふ青磁或は均窯、繪高麗と云ふやうなものが學術的に賞讃され始めました。その翌年、紐育の日本協會主催で凡ゆる人の珍重愛藏して居る宋元以前の名陶を集めて展覽會をやつたことがございます。さうしてその本をワトソンと云ふ美術商から出版しまして、日本の部はモールス先生が説明を書かれ、支那古陶の方はホブソンとウィリアム夫人乃ち主として宋代の名陶を研究した人がやりました。このライツの「支那古陶」と

日本協會から出しました、日本及支那の古陶と云ふものが、私は怖らくは絶後とは申しませぬが空前であつて、あの立派なホブソン編輯のユーモルホブソンコレクションの何百圓するものよりは遙かに立派な挿畫が入つて居る。而て之が支那の古陶趣味をば鼓吹した初めではないかと思ひます。その時にモールス先生が論文の一番終りに書いて居られることは餘程西洋人に感動を與へました。言ひ換ゆればそれは先生は「色々支那陶磁の研究をして見たが是程むつかしいものはない。併し我々の據つて取るべき所は日本の茶人の好むものが矢張り一番宜いものである」と云ふ結論を立てて居る。その頃から亞米利加邊りの博物館の棚から美しいものが隠れて、青磁、天目、繪高麗の如き我々の趣味に適するものが現れて参りまして、この頃はその熱が最も高くなつて居る。亞米利加に比べると英吉利の方は趣味が進んで居りまして、早くから英吉利は支那と交渉がありました結果か、英吉利人は染付を最も好みます。赤繪も好みます。それから黒繪の五彩を非常に珍重します。是は餘程趣味の高尙なことを示すのであります。染付の中でも梅花氷裂と申しますものなどは一對十萬圓もするものが英吉利にはあります。是は多くは壺でありまして、氷の張つてある模様の上に梅の花が散つて居る圖案で、實に氣の利いた染付の共蓋の胴丸の小柄の壺が多い。この壺の本物があれば一對あると大抵十萬圓位の値打があり、主として萬曆から康熙へかけて焼かれた官窯である。何故斯う

云ふものが珍重されたかと云ふと、明朝から清朝の初めに、立春になりますと、張つた氷に龜裂を生じ、この上に咲いた梅の花が散り始めますから、この季節に天子が此染付壺に御茶か御菓子を入れて、臣下に賜はる、詰り勳章のやうなものであるから甚だ宜い焼物である。



康熙梅花水烈染附

怖くは千の中から十を取つたもの、然らずとも千から百を取つた位の名器でござるませう。大抵共蓋になつて居りますが、現存のものは大部分は蓋が残らず、木の蓋で間に合せて居る。これ故に完全に蓋が揃つた萬曆とか康熙のもので、吳須の上等のものであるならば一萬磅が相場となつて居ります。斯う云ふ點は亞米利加人の遠く及ばない所であります。英吉利人が赤繪を好むことも確かに趣味の高い點で、赤繪と云ふものは誠に結構なものであります。横河コレクションの中にも宋朝の赤繪の皿が澤山ござりますが、

私はあの赤繪の色は東洋獨特の彩どりではないかと思ふのであります。

私共支那陶磁を研究する者の仲間、支那陶磁の釉薬は西域傳流であると主張する者もあります。このことは私は或る點までは事實だと思ひますが、悉くが西域傳流のものとは思はれませぬ。私は随分波斯、メソポタミア邊りから發掘された色のタイルを見ましたが、赤繪とか黒の五彩と云ふものは支那以外の諸邦にはあまり見ませぬ。大抵の御方は永樂赤繪とか言つて、赤繪は明朝のものと御考へになつて居りますが、既に宋朝のものが横河コレクションに現はれて居るのであります。恐らくは赤繪は唐朝に始まつてゐると思はれる。この壺の胎は煉瓦で吸水性のもので、少し手荒く扱ふたらぼろぼろに壊はれて仕舞ふもので、その上に化粧がけをして、白い立派な釉をかけて是だけの赤繪になつて居る。軟いから取扱ひに甚だ困難なもので、是が唐朝のものと思はれるのは、是と一緒に發掘されたものが唐朝以前のものであるのです。黒の五彩は英吉利人は大抵康熙のものを取ります。英語ではブラックホーンと言つて居りますが、西洋には梅がありませぬから野茨花と名付けて居ります。しかし黒地五彩は明の成化に始つて居ります。この寫眞も實物をよく御覽にならないと分りませぬが、光澤のない釉をかけて、その上に浮出した模様が如何にも寶石でもあるかの如く色々に着色してある。潮戸物の方から申しますと、この赤と黄、青と黄、斯う云ふボカしは餘程六ツかしい技術で、赤の色

は金で、黄は銀で色を出します、青には鐵もありませうし銅もありませう。紫の所はマンガンとコバルトで、實物は實に見事なもので、この壺は北清事變の時に北京の宮殿から露西亞の兵隊が盗み出したものだらうと思ひます。私は露西亞の革命の際に西比利亞の或る偉い將軍が有つて居たものを譲り受けたのです。幾らでも宜い、どうせ生きては居ないのだからと云ふ譯で、私は甚だ輕少ながら今言つては恥しい程の金で譲り受けました。是と同じものが英吉利の博物館にありまして、三萬五千圓で購入したと言つて居りますが、多分私のもの一對になるものではないかと思ひます。斯う云ふものが或は千の中から十を取つたものに違ひないと考へます。

近來、西洋人間に支那陶磁の研究が盛んになり、従つて西洋の本に依つて私共の斯道の知識の進んで來たことは、洵に結構なことではあるが、同時に一面甚だ遺憾な點もあります。蓋し東洋の文化、東洋の藝術をば西洋人から教へて貰ふなどと云ふことは、斯んな恥づかしいこととは思ふ。さりとて支那の方では一向斯う云ふことは研究いたしませぬ。私は瀬戸物に限らず、東洋の美術、支那の美術を學術的に研究することは日本人の天職と心得て居る。さう云ふ點から聊か私は過去二十數年間と云ふものを支那を歩き巡りまして、金もない癖に標本を集めて多少學術的にやつて居る。無論支那に於ても瀬戸物に就て學術的に出來て居る書物がないでもない。「陶說」「景德鎮陶錄」と云ふ本があ

りまして、いづれも日本に翻譯がありますが、譯本は甚だ拙い。あれを御覽になると間違つてしやうがないから、漢文の原本を御讀みになると宜からうと思ふ。陶說の方は歴代各地方の窯のことを文献の上から見て記述したもので、陶錄の方は景德鎮の御用窯の方を説いて居ります。支那人も言つて居ります如く、兩者共總てを信ずるに足るものではなく、之を金科玉條と致しますと、非常な間違ひが出來ます。支那陶磁の研究家でこの爲に隨分迷はされて、色々な獨斷説を立てて居る方がございます。是はどうしても實物、極端に言へば相當のものでも叩き壊して、藥や土を分析するまでに進まなければならぬと思ふ。池袋に居られる山田と云ふお方は隨分名陶を御有ちになつて居りますが、その中の結構なものを屢々壊して分析なさつたこともある。私も埃及のピラミットから發掘された青釉のかんてら[○]を愛藏して居り、是は亡くなられた柄内大將から戴いたのであり、口が長く出來て居て是から燈心を出したものでせう。之を中尾万三博士が削つても宜いか、ああ宜しいと云ふことで、それを分析されて、この綠の釉が鉛であることが分りました。斯う云ふ研究の仕方ならば兎も角も、若し燒物を骨董的に御やりになると、骨董道落は燒物が最後と言はれる位に興味の深いものであります。この道樂は中々考へものだらうと思ひます。亡くなられた英吉利のキツチナー元帥は私と長いこと旅行されましたが、二百萬圓位の支那古陶を有つて居られました。それで「もう僕は懲り／＼した、

もう古陶には手を出すもんぢやない」と言つて、その頃は焼物も康熙、雍正、乾隆三代の單彩にしか眼を向けられませなんだ。横河先生も趣味を御有ちになつて、澤山のを御集めになりましたが、是は逆も自分で維持するのが中々大變なことで、整理も厄介なことであるし、殊に御子さん方が趣味を御有ちでないとすると容易なことではないから、この度一切の名器を帝室博物館に御献納になつたのでございますが、實に立派な御決断であり、爾今陶磁研究家はこの大コレクションを研究資料として横河先生の御行爲に酬ひなければならぬと思ひます。

兎に角陶説「陶録」程度の知識より有つて居なかつた我々が、西洋人が支那研究を進めて以來随分色々なことを教へて貰ひました。例へば標本は持つて参りませぬでしたが緑色の釉のかゝつた焼物が、千年以上も土中して居りますと、水銀やうの他の色々なものを吸収して、まるで銀メッキのやうになつて居るものがあります。それを從來骨董界では宋窯と言つて居りました。所が米國の市加古のフェルード博物館に居られるにロウプアーと云ふ先生が之を研究した結果、此種の陶器は漢代のものだと言ひ出して、今では之が漢時代の焼物であることが認められるやうになつた。是などは漢の都の西安地方で王莽の刀錢とかその他色々な漢代のもものと一緒に發掘されたからであります。此處に御覽に入れる緑釉の大香爐は今より二十年前場所は遼河の上流奉天の西南の古廟の遺

跡から發掘されたもので、當時私が偶々あの邊を歩きました支那人の家に休んで居りますと、その家に是が置いてありまして、その中に玉蜀黍の粒が一ぱい盛つてありまして大變結構なものと思ひましたから、主人に譲つて呉れないかと云ふと、欲しけりや遣ると頗る氣前の良いことを云ふので、五圓やつたらびつくりして之と一緒に掘り出したと云ふ王莽の刀錢とか銅矛、鐵鏃なども一緒に呉れたので非常に参考になりました。さて此種の土器が宋窯と言はれた時代には故人の村井吉兵衛さんが熱心に集めて居られ私共も色々見せて戴きましたこともあり、爾來宋窯で通つたもので、今日も宋窯と言つて居る人がありますが、今では此種の焼物が漢以前からあつたことが明かになつて参りました。英吉利のサンライトでアイボレーと言ふ石鹼を拵へて非常な御金持ちになつたレヴァーと言ふ人が村井さん同様に此種の古陶の大蒐集家でありまして、この人が亡くなられて巨萬の富と支那古陶の大蒐集を遺されたので、氏の未亡人がレヴァーアーミウゼムと云ふ東洋美術博物館を建設されました。其處の博物館には先頃まで馮玉祥の居りました陝西省から發掘した古陶の大コレクションがありまして、その中に古墳の主の家系を表現した一つの陶製の樹木があり、株から幹になり、幹から幾つも枝が生えて居る。而てその幹に本家の名が刻り著けてあつて、それから出た枝の方に一々分家の名が刻り著けてある。所で印刻されてある文字が殷墟から發掘される所謂殷墟文字である。さうすると、

その焼物が殷代或はそれ以前商時代のものであると云ふことが分つて来て、而かも、すべての器物が緑釉で立派に銀色を發して居りますから、薬のかゝつた焼物は漢代よりも更に古くから支那にあつたと云ふことが明かであります。現に私もこの様な陶片を有つて居る。是はちやうど支那が中華民國になりました時です。今から二十一年前のことですが、北京の南門が非常に狭くて交通が不便なもので、城門の兩側の城壁を叩き壊して自動車道路を作りました時に、色々の土器と一緒にこの釉薬のかかつたものが出ました。當時北京の公使館に居られた小村俊三郎君が私共の爲に北京政府に頼んで貰つて呉れたものであります。考ふるに北京は御承知の通り平坦な所でありましたから、多分現在の城壁の基礎は燕時代の城壁か若くはその後の時代のものの崩れた土壁を用ひて拵へたものだらうと思ひます。さうして發掘された土器には布目のものも籠目のものと一緒に澤山出て居りますから、右のレザアコレクションにあるものが果して殷時代のものであるかないかは別としても、支那には漢以前に既に斯う云ふ釉のかゝつた土器のあつたことは疑ふ餘地がありません。次に私は私共の知人を敢て攻撃する意味ではありませんが、私は元來支那の焼物の釉薬西域傳流説に疑問を抱く者であります。何も彼も支那陶器の釉が西域から傳つたものであるとは斷言し難いと思ひます。此土器の形は罍と申しまして、支那人が穀物を入れる倉庫の形を真似たもので、此緑釉土器には刻印が三ヶ所

に捺してあり、その刻印の文字を高田竹山先生その他の文字學者が周代の文字だと御讀みになつて居る。次にこの土器は漢代の墓から出たものであります。實に巧妙な陶技を極めたもので、恐くは日本の今日の名工でも斯う云ふ筈の使ひ方は出来ないと思ふ位

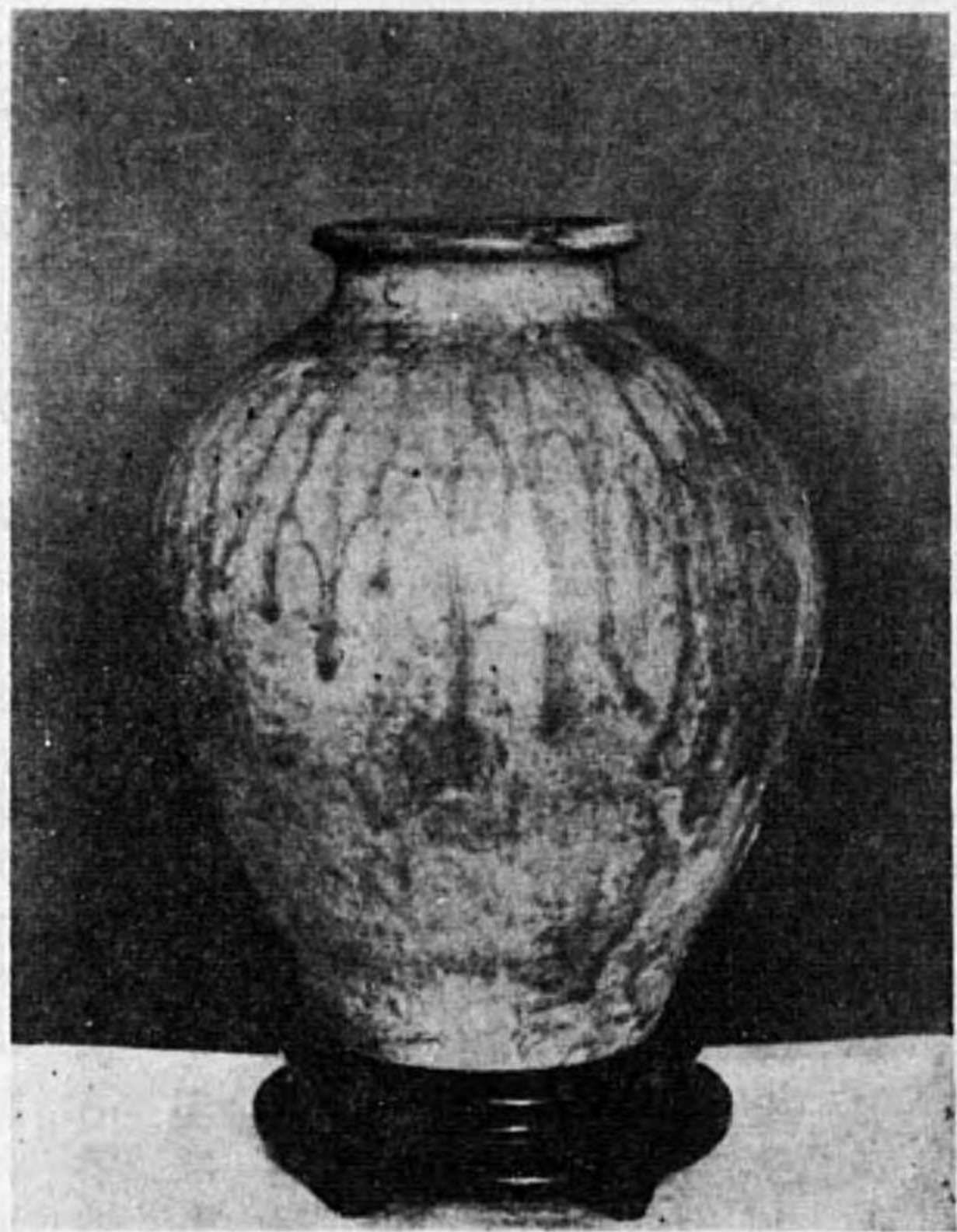


綠 釉 土 器

のものであります。之にも綠色の灰釉がかかつて居る。さうすると此種の釉薬は燕にもあり、殷にもあり、周にもあり、漢にもありと云ふことになり、勢ひ支那釉薬の西域傳來説に大いに異議を唱へたくなるのであります。その證據には、この鉢の寫眞は世界で支那の古陶を一番澤山有つて居る歐洲大戰でダイナマイトで大儲けをしたユーモルホプロスと云ふ人の所有の波斯の古陶

でありまして、宋朝から見ると二千年も前の殷時代にも燕時代にも夙に釉薬があるのです。元來埃及には六千年前から釉のかかつた焼物がございます。またメソポタミアのウルウからこの頃發掘されるものの中にも釉のかかつたものがあります。私はコンスタンチノールブルで小亞細亞で發掘した澤山のタイルを見ましたが、その中には染付の先祖と見られるやうなコバルト釉も見ました。併し是等は概して鉛釉若くは曹達釉のものでありまして、その他の鑛石の釉は殆どない。所が支那には上古から緑の釉があるのみならず、色々な釉があつたことを證據立てられるのであります。是等の水彩畫は私の所有する古陶の標本を寫したものであります。是は燬煌^{ヒョウキョウ}で橘瑞超氏が發掘されました焼物の破片であります。この中には既に均窯とそつくりの堅締めの焼物があります。又この陶片は胎は煉瓦であります。この破片は本當のコバルトで模様を描いてあります。斯う云ふ破片が燬煌から發掘されいづれも皆唐朝のものと思はれる。この破片は私自身發掘したもので、必ずしも漢代のものとは申されませぬが、或は六朝時代かと思はれる古墳から出たものであります。美事な瑠璃色をした釉のかつたで、こぼ、この堅締め陶器であります。次に此徳利は長く土中して居つて幾程か變色して居りますが、唐代既にかくの如き

立派な青磁があつたことを證據立てる好標本であり、之が胎は吸水性の煉瓦ですが、釉とテクニクは後世の龍泉青磁の先祖は夙に唐朝に出來て居つたやうに見えます。是も亦唐朝のもので、矢張胎は煉瓦で出來て居り、不思議なのは高臺の裏が底まで四寸程も



白釉涙痕の唐代土器

上つて居ること、後世の瀬戸物には斯う云ふ作法は殆どありません。而て此天目薬は恐らく最初は光澤があつたかも知れないが、長い年月の土中で全く光澤がなくなつて居る。是は白薬のかかつた高さ一尺、胴廻り二尺五寸の壺であります。土中したもので、汚れて居り、白釉に多少青味が、あり、今日朝鮮で白磁と言つて居るものに類した釉がかかつて居る。よく瀬戸物研究家が涙痕と言はれます、その涙痕が垂れて居ります。それからこの長頸の黄色の徳利はアンチモニーの種類と思はれる釉がかかつて居ります。この土偶

は蒙古から出たのでありますが、どう云ふ人物か分りませぬが多分神様でせう。油煙を被つて眞黒でございましたのを私が譲り受けて根氣よく洗ひました結果、紫と黄色の薬が現はれました。その時これも人形と一緒に出た小さい香爐で紫色のり。薬をかけてあります。この三脚の金剛寺の刻印のある香爐は恐らくは最初は青い釉をかけて焼いたものが窯變して、こんなに色々の斑文を現はしたものだらうと思ひます。陶説には渤海國から唐朝皇室に琉璃色の釉のかゝつた屋根瓦を献上したことがあつて、是は到底中國の及ばないものであると書いてありますが、その渤海國の都は、今の吉林省の寧古塔であり、この紫色の圓瓦はその附近から發掘したものを貰つたですが、餘程大事に焼いたものと見えまして、裏に三十六號と云ふ印が刻り著けてあります。多分伏瓦でございませうが、非常に堅いもので釉も實に見事なものであります。よしんば渤海のものでないとしても確に近世のものでないと斷言出来ず。前述の例證からしても支那陶磁の釉薬は必ずしも西域傳來のもののみではないことが言へやうと思ふ。

一寸青磁に就て申し上げますが、私はちやうど二十年程前に専ら青磁の研究に没頭致しまして御覽の如き「歴代青磁理想色」と云ふものを作つたことがあります。是は六朝時代から唐宋元明清までの手許に集めた標本によつて作つて見たのでございませうが、只今白狀いたしますが、一體支那の歴史を日本の如く萬系一統のものとして歴代歴朝連續的

のものとするのは無駄な仕事であることを覺りました。何となれば、元來支那は偉さうなことを言つて居るが、三千年來天下が統一されたことはない。秦の始皇が天下を統一したなんと言ひますけれども、あの時分の支那の天下は黄河の上流の小さな一地域に限られて居り、唐が支那を統一したと言つても洛陽長安を中心とした黄河の兩岸だけであつて、恰も今日北に張學良、中原に共產軍、廣東に廣東政府があつて、中央政府は江蘇、浙江の二省を統治するのみである如きもので、唯書物の上で偉さうなことを書いてあるのみである。それを歴代歴朝の更なる毎に御用窯の作品がこんな風に變つたなどと考へたのは馬鹿なことをやつたもんだと悔いて居る。多少は参考になりませう。兎に角西洋人も私同様な研究を續けました結果、日本人が未だ曾て知らなかつた名前などが大に明かになつたものがあります。例へば日本で蕎麥と言つて居た釉の名が支那では「茶葉末」或は「茶葉兒」と言ひます。それから「年窯」と云ふ焼物があります。是は雍正帝の時に年希堯と云ふ人が宋朝の青磁や白磁を倣造したものであります。それから均窯が横河コレクシヨンの中にありますが、あれも從來の骨董界には知られなかつた名であり、郎窯と呼ぶ焼物のことが段々分つて來たのは概して西洋人の功績であります。併し西洋の支那陶磁家はジュリヤン、ブツセル、ヒルツ、ロウフアーなどを除けば多くは支那の書物は讀めないところ、我々は支那の書物が讀め、漢字が分り、同時に横文字も讀める。斯う云ふ日本人

が東洋の文化を研究するのが天職であり、また義務ではなからうかと考へます。郎窯と申しますものは俗に言ふ辰砂手であります。而て従來支那の學者並に西洋の尙學家は、郎窯には官窯はないと云ふ説を持して居りました。また郎窯と云ふ焼物には釉の垂れが非常に澤山あるから大抵高臺が磨り取つてあると云ふ説もありましたが、是は一を知つて十を知らない説であります。この標本を御覽下さい底に立派に「大清雍正年製」と刻つてあり是は明かに官窯であることが分るのみならず、底部は毫末も磨つてありませぬ、釉の垂れないやうに巧に高臺の縁で釉留がしてあります。斯う云ふ風に從來の臆説も標本が出て來れば追々と真相が分つて來るだらうと思ふ。

今回の横河コレクションの展覽會中唐三彩が一室を占めて居る。抑々唐三彩なるものは私が支那に居ります時分、乃ち千九百十一年海州から陝西省の蘭州に到る鐵道、所謂隴海鐵道の建設工事中、最初に洛陽から少し離れた義昌までの土工を開始しましたところ、洛陽と義昌との間で偶然大きな陵にぶつかりました。その時に澤山の埴輪が出土した。當時隴海鐵道の技師は佛蘭西人がやつて居りましたので、フランス船で二度も運んで行つたと言はれるほど無数の土偶が發掘され、從つて割合に安かつた。私の有つて居るものの中に斯う云ふ馬の埴輪がある。是は非常に大きなもので、この机位あります。どう云ふ譯か最初市場に現はれた唐三彩は多くは胡粉と朱とコバルトで彩色したものと

が多く、奈良の法隆寺にあります唐朝の人形と同じ手のものが大變澤山出ましたが、中には釉のかかつたものもありました。兎に角どう考へて見ましても、この唐三彩なるものは私は純粹の支那の藝術品とは申されないと思ふ。寧ろ西域藝術だと考へます。作者



西西域模様の唐三彩

は西洋人でないとしても、少くとも支那以外の毛色の變つた人間のやつた仕事だと申されませう。この徳利は横河コレクションの三彩の壺と同じテクニクであります。頸は西洋で言ふフイニックスの頭である。この瓶の片一方には露西亞の帝政時代の旗印のやうな、足が四本で羽が幾つもある鳳凰のやうな鳥が浮彫してあり、片方はキュビトに似た裸の小僧が西域式の矢を射て居る圖面がありますが、斯う云ふ風のものにはメツたに支那の藝術品にはありませぬ。惟ふにちやうど唐三彩の出來た

頃は玄宗皇帝の時代で、玄宗皇帝の時には楊貴妃が居り安録山が居りましたが、兩人共に西域人であり、西洋人です。従つて玄宗帝は餘程西洋かぶれをして居られたのではないかと思ひます。稽ふるに唐三彩なるものは恐らくは玄宗朝一代きりのものではないかと思ふ。何となれば後には宋三彩もあり、前には六朝時代の三彩もありますがいづれも唐三彩とはテクニクが違ふ。馬にしても駱駝にしても悉く支那特有のものであります。横河コレクシヨン中の三彩土偶の如く神話にでもあるやうな一本角を出して居る人間などは支那には幾ら探しても神農以外には類がありません。それから唐三彩が義昌洛陽邊りから澤山出たとしても多寡が知れて居る譯でありますのに、今にちき骨董市場には唐三彩の奇品がまだ續々出て参りますから、何處かで然るべく拵へて居るのではないかと思はれますから、唐三彩にはうか／＼手を出す譯には参りませぬ。

さて支那の焼物をして若し美術品なりと云ふことが出来るならば、これは陶磁器に非ずして私は土器にあるだらうと思ひます。蓋し私は支那の土器は古今の世界を通じてこの位の藝術的のものはないと思つて居る。また世人の多くは支那の陶業家仲間には餘程早くから轆轤があつたやうに言つて居り、先程申しましたロウファ先生などは、支那土器の起源と云ふ本を書かれまして、支那の轆轤は印度から傳つたと結論して居られます。ロウファ先生は世界的の學者で、支那人も讀んだことのない漢籍を澤山讀んで居ら

れる文献學者でありますが、先生の意見は獨斷的であります。その話は別問題として徐ろに支那の土器を研究すれば實に巧妙な細工で、斯う云ふ土器は他にありません。今日の陶磁工藝は随分進んで居りますけれども、その形體、恰好、その手法は支那の上代の土器以上には進んで居ない。而て今日私共が見て至つて粗末なものと思ふ土器が祖先人類にとつて當時如何に尊重されたかは、支那に限らず日本でも、苟も石器時代の古墳を發掘すれば、必ず土器が一緒に出る。この一事を見ても先史時代の人類は土器を焼くに就いて如何に苦心慘憺したかが略ぼ想像出来るのであります。人間と云ふものは利巧なやうであつて聊か智慧の足りないもので、太古時代にはあの粗末な土器を焼くのも實に容易なことではなかつた。祖先人類は最初は色々な食物を瓢に入れたらしい。乃ち炭取りになるやうな瓢に水を入れたり、穀物を入れたのであります。それで先づ缶と云ふ字が生れて、後には缶は瓶になつて居りますが、缶とは瓢のことである。土器が焼成される以前には人類は瓢とか籠に水や食物を入れて居つたのであります。それでは鼠に齧られて破られる惧がある。是はいかぬと云ふので、石を根氣よくくり貫いて石の壺や井を拵へたりした。その石も朝鮮のすき焼鍋のやうな柔かい石ならば宜しうございませぬが、硬い石になると中々骨が折れる。色々工夫したがその中に考へ出しまして、瓢または籠の内や或は外に泥を塗つて焼くことを發見した。籠だけでは兎角罅が入り易い

ら上皮に麻の布を張り著けて焼いたりした。それでも中々思ふやうに焼けなかつた様子が窺はれます。かくの如くに一見粗末な土器と雖も先史人類にとつては非常な貴重品であるから、親か兄弟か自分の最も親愛なるものが死んだ場合には、彼が生前愛用した所の壺や瓶を一緒に葬つて居る。ある時齊の桓公が井戸を掘ると偶然に大きな瓶とその内に羊の恰好をした土偶が二三匹入つて居る箱形の土器を掘出したので、之を孔子様の所に持つて行つて一體は何であるかと伺つたところ、孔子はさう云ふものは未だ曾て御存じなかつたと見えて、是は「地の怪なり」と答へられた。さうして支那には「梓」と云ふ字がある。日本の字引にはありません。私はその井戸を掘つた時には多分原始人の墓にぶつつかつただらうと思ひます。さうして親に孝行の息子が死者にとつて尤も大切であつた羊を一番大事にしてゐた瓶に入れて葬つたものではないかと思ひます。元來羊は支那人の思想を全く支配してゐた。例へば、目出度いと云ふ「祥」の字は昔は「羊」と書きました。また人間が大きく育つて行くには養はなければならず、さうして人間が大きくなるには羊を食へばよかつたから、羊を食ふと「養」になる。何が美しいかと云へば、羊の大きいのが「美」である。當時の人間の動作でもさうです。何處其處に到達すると云ふ字は、土の下に羊が走るを書けば「達」になる。羊に就いては斯様な意味が數へきれないほど澤山ありますが、土器に就いても亦偉大なる意義が含まれて居ります。抑々この土

器とても上代に於ては誰も彼もが作られたものではなく、土師と呼ぶ特殊なる技術家があつた。舜の時代に於ける陶工は悉く聖賢の士としてあります如くに非常な偉い人でなければ土器は作れなかつた。舜の大臣の一人に陶と云ふ人があつて、舜は陶を用ひて政を爲さしめたと申しますからには、この人は學者であり政治家であり、行政家であると同時に焼物が出来た人に違ひない。焼物を作るに就いても如何に我々の祖先が苦心したかの例證を申しますならば、學校の先生が子供を育てることを「燻陶する」と言ふ。燻陶と云ふことは焼物を焼くことで、今日ならば素焼の土器を窯の中に入れて焼くのですが、古い時代には中々さう云ふ智慧はありませんでしたから、地面に淺く穴を掘り、その中に天火乃ち日光で乾かした土器を入れ、それも急に火に當てると罅が入るから、雜草か枯葉かで徐ろに燻して根氣良く焼き堅める。さう云ふ風に苦心辛酸を嘗め、恰も子供を育てるやうに大切に土器を焼くのが所謂燻陶である。それから又「淘汰」と云ふ字句がありま

す。この節は役所や會社で首を切ることを淘汰と云ふが、淘汰なる言葉も元來は窯業上の術語である。詳説すれば、是は我々の祖先が土器を焼く時、混和しない荒土で焼くと必ず割れる。それが爲に先づ粘土を十分に水簸して沈澱させ、非常に細微の泥となつたものを練つて、練り上げて、軟い粘土にして焼物の土を作るのが淘汰であつて、決して人の首を切ることではない。もう一つ陶冶と云ふ言葉がある。是も焼物の型を作るこ

とで、焼物を作るには淘汰した土を陶冶して煉陶し爰に始めて完備した土器が出来る。でありますから、我々の祖先は土器の爲に随分苦勞したことと思はれます。而して上代の支那土器の全部が轆轤細工でないこと云ふことは、往年私は南京で古い墓を掘つたことがありまして、それは宋朝のものかも知れませぬが、餘程大きな高さ二尺五寸大の銀色に變化した緑釉の薄手の大瓶を發見致しました。それを掘る時に、若し完全に掘り出したならば十圓やらうと云ふことを約束致したところ惜しいことには一寸したハヅミで鍬の先に當つて壊れましたから、一圓だけやつて破片を少々持つて歸りましたが、後でその破片を吟味して十圓やつて皆んな持つて歸つたらよかつたと思ひました。何故ならばその瓶の内側には人間の爪の跡が一ばいに著いて居て大變參考になりましたからであります。高さ二尺五寸胴廻四尺もある薄手の大瓶を練り上げ細工で造つたのでありますから、その陶冶が如何に困難であつたかが想像出来るのであります。而て一見轆轤仕上ほど如何にも美術品として優秀なものであるかを感じさゝれたからであります。

それから、話が一轉致しますが今日我々の仲間で、支那の焼物の窯は南北に依つて形が違ふ。北は丸窯で南は登り窯であり、北支那では燃料に石炭を用ひ南では薪を用ひると説を立る人もありますが、私はこの説を容易に受入れることが出来ないと思ひます。此點も漢字が能く説明して呉れます。支那では焼物の窯は普通「窯」の字を使つて居ります

が、時には窯の代に窑の字を用ひます。この二字を見ると、窯の方は初めに穴があつて、その下に羊を置いて下から火で焼くと云ふ意味であるが、窑の方は穴の中に瓢を泥で包んだ瓶を入れる意味の字となります。それから陶と云ふ字は最初は多く「匋」を使つたもので、「匋」は「包」で、匋は干瓢を泥で包む意味となり、後には結局丸窯のこととなつたのだらうと思ひます。それから「陶」の字の偏の「匋」は「阜」の字の略であり是は小山の意味であるから、詰り山の傾斜にある登り窯を意味するのです。舜の大臣の中に陶と云ふ人が居たとすれば、太古北方にも夙に登り窯があつた證據になります。要するに原始時代は概して匋乃ち丸窯であつたのが、後に多量生産の必要から「下」が著いて登り窯になつたと見るのが穩當ではないかと思ふ。その孰れにしても私は南北共に昔から丸窯もあり登り窯もあつたらうと考へる。元來漢字は北で出来たものであるから、北に登り窯がないとすれば、登り窯を意味する陶の字は出来なかつた筈である。私は最初は南北共に丸窯であつたのが後に多量生産をするに従つて登り窯になつたのだと確信して居ります。現に廣東地方へ行くと、極上手の焼物は今でも丸窯で焼き、多量生産の場合には登り窯で焼いて居ります。

それから、北支那では燃料には石炭を用ひ南では薪を用ひる説にも同意が出来ない。支那人が石炭を燃料に使つたことは比較的近世のことで、初め山東省で石炭を發見した

時は硯の墨に使つたもので、燃えることを知らなかつたのです。尙ほ萬里の長城に使つた瓦を焼いた爲に、北支那一圓の山には薪にする木すら一本もなくなつたと言ひ傳へられました。あの廣大なる萬里の長城を築き上げる煉瓦を焼くのですから實際そんなことがあつたかも知れない。兎に角長城の瓦も石炭ではなく薪で焼いたことは確でありませぬ。よつて支那南北に依つて窯が違ひ、燃料の違ふことは私の探らないところでありませぬ。

大變時間が長くなりますが、どう致しますか、若し御構ひなくばもう少し御話しても差支ありません。

惟ふに、兎角瀬戸物を研究する人は直ぐに天狗になる。近頃大谷光瑞師が「支那古陶」と題する寫真帖を出されまして、その本の中には白磁でこの寫真ソックリの壺を邢窯だと言つて居られます。邢窯と申しますと、今日の北京漢口線の順徳府にあつた窯で、其處で白磁が出来たと云ふことは記録にありますけれども、今日では何等窯跡も發見されませぬ。兎に角此手の白磁を唐代の邢窯と確定されるのは聊か獨斷でないかと考へられます。邢窯にしても定窯越窯にしても厚手のものでなかつた様です。何となれば支那の本には邢と越の甌を樂器に利用したと書いてありますから、必ずや薄手の良い音のするものだつたらうと思ひます。斯う云ふ一點の疑を挟む餘地の無い銘がちゃんと入つた

ものの外は、是は何窯であると云ふことは容易に斷定出来るものではありません。澤山な標本を持つて比較研究しなければ確かなことは申されませぬ。この標本は康熙の瑠璃でありませぬが、全く實に見事なものであります。この瑠璃の釉は金とマンガンとコバルトで出来て居りますが、釉藥西域傳流説を唱道しても逆も西洋にはこれに似寄つたものはありませぬ。この瑠璃にしまして、染付にしまして、黄南京に致しまして、如何に支那の歴代朝廷が富裕であつたか、又その時代の文化が如何に進歩して居つたかが略々想像出来ませぬ。歴代歴朝の祭器にしても、天を祭るには何色、地を祭るには何色、並に東西南北の諸神と共に天地神明を祭るのにそれ〴〵の色が決つて居る。康熙の瑠璃の如きは清朝の黄金時代の作品でありますから、斯んな見事なものが出来ませぬ。黄南京と云ふ釉藥は銀で拵へたものとアンチモニーの入つたものとは色彩が違ふもので、私は明清歴代のもの揃へて居りますが、その變化は實に面白い。而して右の黄釉の如きも西洋のものとは根本から異ひます。是は支那では老僧衣と呼ぶ鐵釉であり、禪宗の坊主の衣の色に似てゐるから命名したのでありませぬ。こんな釉藥は西域にはありませぬ。

さらば是等の釉藥が如何にして支那で發明されたかに就いて、或人は支那は古代から銅器鑄造術が發達して居つたから、その銅器の埴埴（つちま）に現はれた色々の變色を見て、遂に銅

鐵、金銀から釉藥を發明したのではないかと云ふ説を立てて居ります。是も面白い説で、西域傳説よりは寧ろ進んだ説かと思ひます。私も上代の埴塙の破片を大分集めて居りますが、その中には色々の釉の痕が残つて居ります。それは兎も角何故支那の陶磁が世界各国の焼物に比べて比類のない發達を遂げ、殊に單彩に於て優れて居るかは、由來支那には玉器を尊重する風があつて、その材料の玉は玉出崑崗と千字文にある如く昔から西域より傳來して居つたもので頗る高價であるから、そこで、何んとかして玉に代るものを拵へやうと云ふ一心一念から、遂に白磁とか瑠璃とか辰砂とか黄南京或は青磁などの玉に似たものを拵へやうと努力したのが、報ひられて終には世界唯一と稱へられるまで非常なる進歩を遂げたものであると申上げることが出来る。

元來、焼物は如何に釉がよくとも、如何に形がよくとも、之を完全に仕上げる所のものは窯師の腕一本である。詰り窯の中の火度を見る人の力にあるのである。今日はゼーゲル錐と云ふものが發明されて、粘土の棒を窯の中に入れて置き、その頭の曲り方に依つて火力が攝氏の何度と云ふことが分るのでありますが、支那の昔にはそんなものはありません。ませぬから、ちよつと窯の火を見て、まだ早いとか、もつと焚けとかいふ云ふ加減は窯師の目一つでやるのであります。ですから、焼物と云ふものは或る點から言へば、人間の藝術ではなく、寧ろ火の藝術であるとも考へられます。で、この一點が支那の焼物を鑒賞する

一つの妙所であります。故に支那の焼物に就いて總體に亘つて御研究になるのは容易なことではありますまいから、先づ漢時代にはどう云ふものが出來たとか、唐の時代にはどんなものが出來たかと、時代的研究をするのも題目の一つであります。私はこの美術學校で九回の講義をしまして、その一回分を『支那陶磁の時代的研究』と題して出版致しましたが、そんな風の御研究をなさるのも面白い。又地方的に何處ではどう云ふものが出來たと云ふことを研究なさるのも興味があり、又分類的に青磁とはどう云ふものでどんな種類があるか、或は白磁はどう云ふものであるか、黄南京はどう云ふものであるかと云ふ風に研究するのも面白い。又これは磁器で、吸水性のものなれば陶器であるとか、同時に土器で以て朱泥の如く磁器以上の硬度のものがあり、之を炆器と呼ぶとか、斯う云ふことを研究なさるのも趣味の上に非常に面白いと思ひます。私は或る點から申しまして、支那の陶磁は北から南に移つて行つたと見るのが至當ではないかと思ひます。唐時代に越州窯が評判でありましたが、當時既に北支那にも青磁があつたやうでございます。越州と云へば今日の浙江省の會稽のことで、天勾踐を空うする勿れ云々の古詩で有名な地方であります。實は最初の越州青磁は何處で焼いたのか未だに判明至しませぬ。多分燃料の關係上窯元は轉々と移動したものと思はれます。しかし南宋時代の浙江の青磁は概して紫口鐵足で、口の方が紫色で足の方は鐵色を呈して居る。白磁は江西省を

中心として、南は福建で、それ以外の白磁は大抵化粧掛乃ちインゴペーを施したものである。右の如くに地方的に焼物を研究すると非常にいい材料があるだらうと思ひます。又焼物には色々の名稱があります。青磁にも日本的に言へば砧手とか七官天龍寺手とか大雑把な分類をして居りますが、實際は千種萬様でありますから、之を時代に依り、或は窯に依り御研究なされば非常に興味が深い。白磁に致しまして、私が有つて居ります標本だけでも四五十種の異つたものがございます。青磁にも白青磁と申して青味を帯びた白いものもございます。繪高麗必ずしも俳畫風の粗描のものばかりではありませぬ、實に巧妙なる像嵌細工のものもございます。染付になりますと、極く古いもので土申したものは色が變つて居りますが、この標本の如きは恐らくは宋代のものではないかと思ひます。此寫眞は俗に人形手青磁と申しまして、是は元朝のものだらうと思ひます。作法が元の均窯ソツクリであります。此種の井鉢は三寶碗と申し、佛法、僧と三碗一組となりませんが、私は「法」と「僧」の二碗しか有つて居りませぬ。染付とは、素地の上にコバルトで繪を畫きましてその上に白釉をかけて焼きますと、紫の色の模様が現はれるのであります。この見本は永樂の染付と言つて居りますが、作法は至つてプレミティブなもので、まるで土管のやうに厚くて重く、而かも三ヶ所で繼いであります。こちらの染付はたぶん長頸の徳利の上部を切り取つて水指にしたものでありませうが、高臺の下には大明正徳

年製と云ふ年號が書いてございますから、是は嘉靖と成化の間のもので思ひます。此の方は宣徳の染附だと云はれて來ましたがその點はハツキリ分りませぬが兎に角古いものだと云ふことだけはお分りになり、斯う云ふ風のプレミティブな染付は明朝でも餘程初期のものと思はれます。染付は染付で曆朝官窯の時代を追ふて御研究になると面白い。唯之を骨董的に御やりになると研究の範圍が狭くなる。また骨董屋さんの手で焼物を御集めになるには、餘程生活の豊かな方でなければ出來ない。よつて先づ知識を御拵へになつて、それからそろ／＼手を御出しになるに若くはない。展覽會や何かの機會に於て大いに知識を濫奮なさつて、それから後で時には手頃なものがあつたらあ求になるのも宜しい。偶に贗物を掴みますと知識は進歩いたします。自分で實物を御持ちになるのは頗る結構でございますが、餘り澤山に御集めになると、仕舞ひには横河さんのやうに何處かに保管して貰はなければならぬと云ふ様なことになりませう。

終りに、幸ひに今日は宮内省からも御臨席になつた御方もございますし、博物館の幹部もお見えでございますから一言申上げて置きたいことは、あの立派な横河コレクションが帝室博物館に納まりましたのは、品物に取りましても、國民の爲にも非常に結構なものと存じますが、同時にこのコレクションは是非とも骨董的ではなく、學術的即ちサイエンスとヒストリーの點に力を入れて公衆に御見せになる様に願ひたい。再説すれば配列

に就ては時代的に或は窯の區別に依つて説明を附し、どう云ふ風に焼けばどう云ふ風に出来上るものだと云ふ學理的の説明を加へ、博物館に行けば支那の焼物に就て大體の要領が得られると云ふ點まで御進め下さることを切に希望いたします。

今日は私に二人分話せと云ふことでありましたが、纏りのない長談議を致しまして是で終ります。(昭和七年十二月五日講演)

本講演の資料として多數の水彩畫を使用せられました。印刷の都合上挿入出来なかつたことな遺憾と致します。

(編輯者)

支那陶磁の色と模様について

國寶保存會委員 奥 田 誠 一

是から支那陶磁の色と模様と云ふことで御話を致します。陶磁器の色と模様と云ふことは之を總括して申せば結局支那陶磁の裝飾と云ふことになりす。裝飾を分ける色と模様の二つになるのであります。第一に色に就いて御話を致します。

先づ陶磁器の色と申しますと素地の色と、その上にかける釉藥の色と二つになります。そこで初めに素地の色に就いて申上げやうと思ひますが、この點は化學の領域に涉りますので専門家の御説を受賣りするのでありますから、その點は御了承願つて置きます。陶磁器の體を成すものは御承知の通り粘土或は磁石でありまして主として珪酸と礬土の結合したものであります。所が實際の陶土と云ふものは之等主要成分のみでなくして色々のものが混じて居ります。其内で最もよく含れて居るのは鐵で殆ど土の中に之の含まれて居ないものは少ないのであります。そこで生地に含まれて居る鐵分の有無多少に因り、又焼く所の焰の性質に因つて素地の色が變るのであります。生地に含れて居る鐵分が極く少ければ白色に近くなるのであります。鐵分の含れて居る量が多い場合

には酸化焰で焼く場合と還元焰で焼く場合とで色が違つて来るのであります。前者の場合には赤くなりませんが、後者の場合は青くなりません。焼成の際に燻つて炭素が素地の間に這入ると黒くなります。家根瓦の色がそれであり、故に素地の色は前に申しました、白か赤か青か黒かの大體四色であります。最も濃淡の差はありますが、色々な色彩が表はれて居ると云ふものではありませぬ。所が釉薬の色と云ふことになる、と非常に複雑なものになつて参ります。先づ第一に素地の上にかかる釉薬それ自身の色彩は決して素地の色彩の如き單純なものでなく、其色相も種類が多く鮮麗なものがあつて、其上釉薬の下に繪付する顔料の關係。釉上加へる色彩裝飾に依つて色々複雑して参ります。元來陶磁器の釉薬は硝子と同性質でありますので其成分にも種々ありまして、之に依つて其色彩の表はれ方が違つて参ります。例へて申せば發色原料の礦物が同一でありまして、釉薬の成分に違ひがある場合には變つた色彩が現れます。のみならず焼成の際の焰の性質に依つても色彩が變つて参ります。こう云ふ事であり、ますので大變複雑な事になります。

釉薬の發色の原料として昔から用ひられたものの中、最も主なるものは鐵であります。先づ媒融劑が曹達の場合に少量の鐵を入れて、それが酸化焰で焼かれると黄色になる。場合に依つては赤茶或は黒になります。是が還元焰で焼かれると青になります。是が

即ち青磁であります。所が礬酸釉に鐵を入れて酸化焰で焼くと帶褐黄になり、鉛釉に鐵を入れて酸化焰で焼くと黄色になります。所が鐵の分量に因つて又大變違つて来る。極く少量の場合、一プロセント位のものでありますと、之を酸化焰で焼くと赤黄色になり、還元焰で焼くと色が出ないのであります。それが多くなつて一五プロセント位になると、酸化焰で焼くと赤褐色になり、還元焰で焼くと青くなつて青磁になる。是が七、八プロセント乃至一〇プロセントになると何れも黒くなる。所が又窯の火を止めてから後の冷却状態に因つても色が變つて来る。この冷却状態に因つて色が變化すると云ふことは、實は私の友人の小森忍君の研究で分つたことであり、ます。先づ急に冷したのと緩に冷したので色が違ふ。又最初急に冷して後緩に冷す場合と、それから先づ緩に後急に冷す場合とでも色が違つて來ます。それから先きに緩に冷し後急に冷し又緩に冷す場合、先きに急に冷して次に緩に、又急に冷す場合等、此冷やし方に色々な組合せが出来る譯であります、之れ等の組合せ方に依つて或る場合は建窯のやうな黒になり、或場合は黃蕎麥、青蕎麥のやうなものも出来るのであります。斯う云ふ風にして色々なものが出来ることを古人は祕密にして居つたのであります、それを化學的に發見したのが小森忍君で、怖くは世界的の發見であり、ます。よう。

次は銅であります。銅は曹達釉の場合に酸化焰で焼きますと緑になり、還元焰の場合

は橙色或は褐色になる。硼酸釉でありますと、酸化焰の場合には濃青色となり、還元焰の場合には紫赤色或は辰砂色になる。鉛を使ひますと、酸化焰が濃青色、還元焰は青緑色となります。そこで銅は大變不思議な働をするものでありまして、或る温度に達すると揮發します、さうして飛んで仕舞ふ。でありますから場合に依ると銅が消えて何も色がなになりません。是は大分彼方此方でやられて居りますが、この銅の揮發現象を利用して、陶器の器物自身に釉薬をかけないで、匣の内面に銅を塗つて焼くのです。さうすると或る熱度に達してから銅が揮發する。さうして中の器物に喰つ着きます。此場合には非常な小さい分子になるから大變美しいものになる。英吉利のダルトンなんかは之をやつて居る。どうして斯んな美しい赤色が出るのかと思ふ位にいい色を出して居るので、それを日本の學者が研究した結果發見したものであります。

それからクローム。是は青磁の原料として一般に使はれるもので、曹達釉の場合には酸化焰に於きまして還元焰に於ても青緑色になる。従つてクロームは青磁を造る場合一番安定なもので、反之鐵は焰に因つて變化する不定なものでありますから、經濟的に考へると非常に損であります。多數同色の青磁器を採らうと思つて窯に入れると、ちよつとした焰の變化に因つて色が變るから、往々にして思ふだけの數が採れないことがあるが、クロームにはその心配がないから一番經濟的である。それで現在は經濟的に製作さ

れるのは殆どクローム青磁である。瀬戸邊りでは古くからクロームを使つて便器に迄青磁を焼いて居ります。それで此種の青磁を惡口を言つて、便器青磁などと言つて居ります。クロームを硼酸釉に使ひますと黄色が出るし、鉛釉に加へて酸化焰で焼くと温かいやうな黄色になります。

ウラニウム。是は酸化焼成しますと黄色、還元焼成しますと緑又は黒になります。

まだこの外に色々な原料がありますけれども、普通の陶磁器には使はれて居りませぬから申上げませぬ。次に釉薬の下に染付として焼いて發色させる場合に就いて申上げやうと思ひます。

先づ釉下顔料として擧げるものは銅であります。それから鐵、コバルト、是がその主なるものであります。銅は釉下顔料として酸化焰で焼きますと緑になり、還元焰で焼くと赤桃紫黒になります。詰り是は俗に云ふ辰砂色であります。鐵の方は酸化焰で焼くと赤褐色、黒になり、還元焰で焼くと青或は黒になります。コバルトは酸化焰で焼きますと、黒青くなり、即ち俗に云ふ呉須色になります。染付の少し色の汚い黒味のあるものは酸化して居るのであつて、その證據には生地が少し黄色になつて居る。それを陶器の専門家の間では生地が酔つぱらつて居ると申します。それは酸化して居ることであり、コバルトを還元焰で焼きますと、是が所謂染付色で鮮かな青色で俗に云ふ祥瑞とか何と

か云ふもの色になります。

次に釉上顔料の原料に就いて申上げますと、鐵を焼付けますと赤になる。之には紅殻を使ひます。鉛を少し入れると黄になる。銅は酸化銅或は銅に鉛を入れて使ひますと緑になり、曹達を入れると青になり、炭酸銅を使ひますともつと青藍色になる。コバルトは染付の場合も上繪付の場合も藍になります。酸化マンガンは紫から褐色になる。ニッケルは帶黄綠色から褐綠色になり、チタニウムは黄色になる。アンチモニーは鉛を加へて黄色になる。金は鹽化金に鹽化錫を加へると桃色或は牡丹色になります。白金は黒になります。是は非常な宜い黒になりますが高價なものでありますから餘り使はれて居りませぬ。銀は黄色になります。それで是等の礦物は互ひに混合し合ふと色々と又複雑な色を示すもので、例へばコバルトに亞鉛を加へると群青色が出る。又コバルトに鐵を加へて焼くと黒が出る。コバルトにアルミニウムを混ぜると蒼青色となり、又酸化亞鉛、石灰、礬土、臘石、斯う云ふものを混合しますと白が出ます。

そこで、是迄は陶磁器の色を原料の上から見たのであります、之を製作された時代の上からその遺品に依つて見て行かうと思ひます。先づ一番古い遺品の出で居るのは漢であります、この邊の細かい時代分けは中々仕悪いもので、同時代の織物とか染器とか種々な工藝品及美術品の遺品に依つて陶器の時代を推すのであつて、細かいことは分ら

ないのであります。それで大體唐以前と以後に分けて話しますと、唐以前の陶磁器の釉色は綠色と黄色が主であります。世間で漢代と稱せられる陶器の中に鉛釉に銅の入つた緑のものがあります。又鐵の入つた黄があります。それから別の黄があつて、それは植物性の灰の釉に鐵が稍入つて居つて、それが酸化焰で焼かれた黄であります。先づ唐以前の釉色としては綠と黄が主なものであります、唐になつて來ると所謂三彩釉の綠と黄と藍が現はれて來て稍複雑なものになります。宋になると又複雑になつて來て、宋代の有名な官哥汝定、この系統のものは青或は淡青白、この三つの系統のものであります。同じ宋の龍泉窯も青であります。建窯は黒の系統、邢越は白或は稍青を加へた系統のものであります。それから宋の均窯と稱せられるものに始めて紫が出て參りました。この紫色は唐にその前驅をなすべきものは現れて居ります。是は銅性の釉であると思はれて居ります。又宋には上繪付のものがありますので又種々の色が現れて參ります。それは鉛と銅で出來る綠、鐵で現はす赤、鉛と鐵の黄、この三色が宋赤繪と稱するものに現れて參ります。是が明になると又複雑な色になり、清になると益々複雑して來るのであります。支那に於ては釉藥の色の名稱は實に細かく言ひ現して居ります。書物に出て居る名を以て實物に當つて見ると甚だ困る事がありますが、言葉の豊富な支那のことでありますから、非常にデリケートな色の差を文字に依つて表現して居ります。

先づ赤の系統に就いてどう云ふ様に表はされて居るかを見ると、寶石紅、霽紅、祭紅、醉紅、鷄紅、柿紅、羊肝、猪肝、羊の肝の色と猪の肝の色との區別などは我々には分り難いものですが、僅かの色の差で變つた名が着けられて居る。それから珊瑚、釉美人、祭、豆、紅、桃花紅、この桃花紅と云ふのは西洋人の言ふピーチブルームであります。桃花浪、これも赤の變化でありませうが、支那人に聞いても分らない。實際支那の陶器の色の稱呼は實物が出ないで書物の上から文字の上から出たと思はれるものがあります。それが爲に色々の異つた名稱がありましても、その色の差が實に分らないものがあります。海棠紅、鮮紅、抹紅、胭脂紅、粉紅、棗紅、櫻紅、肉紅、橘紅、姍々臉、美人臉、これは美人の臉の赤味を帯びた色と云ふのでありませう。楊妃色と云ふものがあります。是に至つては誰にも分らない。楊貴妃にお目にかかつた人はないのでありますから。それから積紅、朱紅、大紅、斯んなものが赤の名前でありませう。

紫は茄皮紫、葡萄紫、乳鼠皮、均紫、玫瑰紫。この位であります。この中乳鼠皮と云ふのは面白い名と思ひます。鼠の赤ん坊の色であります。鼠の赤ん坊の色と焼物の色と實によく似たものがございます。是以外に着ける言葉はない。是等になると、支那の人は名前を着けるのに實に巧いと思ひます。

青。影青、豆青、天青、雨過天青、孔雀綠、東青、梨青、蛋青、蟹甲青、蝦青、甌包青などがあります。

豆青と云ふのは青磁のことでありまして、清朝に於ては青磁とは申しませぬ。豆の青と申します。東青は豆青と同じである様に見えます。

それから綠の系統。新橋瓜皮綠、鴨哥綠、秋葵綠、西湖水、蘋果綠、翠羽、渡菜綠、松花綠、茶葉末、鱈魚皮。この位の名があります。蘋果綠と云ふのは西洋人の言ふアップルグリーンで、此色の磁器は非常に高價なものであります。鱈魚皮と云ふのは茶葉末に似て居りまして、鱈の脊の色であります。

藍。積藍、酒藍、寶石藍、玻璃藍、魚子藍、抹藍、海鼠色、藍裙。斯う云ふものがあります。

黃。鵝黃、蛋黃、蜜蠟黃、雞油黃、魚子黃、牙色、淡黃、金醬、芝麻醬、茶葉末。これだけあります。金醬と芝麻醬と云ふのは褐色に近いものです。それから黃褐色には老僧衣と云ふ名がある。褐色には鐵繡花、是は錆の色です。

黒には黒彩、烏金、古銅、黑褐、鐵棕等がある。烏金には金が加つて居ります。

白には月白、魚肚白、象牙白、蝦肉白等がある。魚の肚の白と蝦の肚の白などはちよつと區別が着け難い。

次に、二色以上の色彩の相互の關係から文様化された色彩の生じた場合に言ふ名があります。火焰紅、火焰青、豆彩、胭脂水、青華三彩、五彩、粉彩、苔點、綠夾彩、鶉羽文、鸚鵡斑、星點、填白。所謂辰砂釉の赤色が斑になつて宛然火焰を見るが如きものが火焰紅、青の場合が火焰青

である。豆彩と云ふのは緑色が主調となつた彩色。胭脂水は牡丹色の所謂胭脂色で模様が着けてあるもの。三彩・五彩は黄と赤と緑。及赤、綠、黄、紫、青が主なる色彩のものである。粉彩と云ふのは不透明な釉薬で畫いたものを言ふ。苔點綠は桃花紅のものが一部酸化して綠の點が出来るのを言ひます。夾彩と云ふのは色で塗り潰した模様の中に他の色で文様が描いてあるものであります。次は原料に因つて色の模様が出来るもので、鶉羽文は鐵の入つた生地と入らないものとをでつちり合せて焼くと一種の縞目のある模様が出来る。鶉斑は釉薬の結晶の色で、星點は日本の星天目です。填白は高麗の雲鶴や李朝の三島など他の色の埴地に白土を象嵌したものを指します。

色の方の話はこの位にして模様に移ります。模様をその内容から御話すれば、先づ幾何學的模様で、是は極く古い所に多いのであります。例のアンダーソン氏が發掘しました紀元前の何期層とか云ふ所から發見されたと云ふことで、紀元前二千年乃至三千年と稱せられて居る、甘肅の土器と稱する、ああ云ふものにこの幾何學的模様が多数あり。又漢代の瓦器にもある。唐三彩にもあり、宋の時代にも多少残つて居る。俗に言ふ宋三島と云ふのがそれである。是が明朝に行くと古銅器文様の模倣として残つて居ります。

次には、天體文様。日月星辰雷電と云ふやうなもので、是はこれのみ單獨に現されて居るものは少く、他の模様と結合して居るものであります。

山水風景文。是は相當古くからありまして、漢代と稱せらるゝ博山爐などにもこの文様が現れて居る。或は宋代の陶枕などにも出て来る文様である。明朝になると山水文様は非常に多くなつて來て、染付或は五彩等で盛んに表はされて居ります。

人物道釋文。是は相當にあります、古い所には少い。漢などには瓦器に人物らしいものが間々表はしてありますが、それは極く少い。宋邊りにも少い。それが明朝になると盛んに染付或は加彩文に出て參ります。

動物文。最も好んで用ひられるものは龍、鳳、魚、金魚、鹿、蝙蝠。鹿と蝙蝠は福祿と音を通はして好むで使はれて居る。例へば百鹿尊と云ふて澤山の鹿を林間に描いたものがあつて、器物の一つの型になつて居る程であります。その外に獅子、虎、麟、猿、馬、駱駝などがあつて、鼠、猫、狸、狐などは極く少い。

花卉文。是にも限られた種類があつて、地方々々に依つて表はさるゝ植物の種類が限定されて居ります。そこで支那では最も尙ばれ最も目に觸れるのは牡丹、菊、竹、松、芭蕉、梅、桃、杏、石榴、薔薇、櫻、蘭、水仙、瓜、百合、靈芝などで、この中竹は北の方にありませぬが、陶磁器の最も多く造られる景德鎮は南でありますから、それに竹文様のあるのは當然であります。花卉文としても凡ゆる植物が出て居ると云ふのではないのであります。

工物文。例へば建築物、樓閣とか船、橋、器物、家具のやうなもので、斯う云ふ文様は清朝に

於て最も多く使はれて居りました。明にも幾らかありますが、宋以前になるとこれのみ獨立した文様は甚だ少くなるのであります。

人事怪奇文。刀馬人鬼祭遊戯等であります。所謂騎馬人物のことを刀馬人と言ひますが、一般に戦争して居る文様を此名で呼んで居ります。遊戯にはよく「子捕ろく」をして遊んで居るものがあつて、是は非常に面白い。漢のものには戦争や狩獵や祭典の文様が現れて居るものがあるが、宋になると是が見えなくなり、又明から清へ來ると又現れて居る。

次に、製作技術に依つて表れる文様。

釉薬をかけて焼いてその熔け方に因つて現れるもの。それに就いて支那人が色々の名前を着けて居る。密淋釉蠟淚、淚痕、蚯蚓走泥。油が流れて固つたやうな一種の模様が釉薬に因つて現れたのが密淋釉蠟淚、淚痕は涙のあととやうな釉薬の痕で、蚯蚓がぬかるとみぬたくり廻したやうな文様が現れたのが蚯蚓走泥。所謂均窯の内面に蚯蚓走泥の現れて居るのは宋均窯で、それが無いものは後のものであると言はれて居る。

窯變。是は結晶その他の物理的現象、泡の如きものに因つて現れる文様であります。これには霞片、星點、滴珠、曜變と云ふやうなものがあつて、この中で霞片と云ふのはどう云ふものを言ふのか分りませぬ。星點と云ふのは星建蓋のやうなもので、泡と結晶に因つ

て一種ぼつ／＼の文様が出来たもので、日本での所謂油滴であります。滴珠も同じことでもあります。曜變は虹の七色の色が模様化されて出たものであります。

次は釉薬と埴地の關係から出来る文様。これは開片(龜折詰りヒビ)であります。これには魚子紋、牛毛紋、柳葉文、蟹爪紋などの名があります。魚の卵子のやうな模様、牛の毛のやうな模様、先の廣がつた柳の葉のやうな模様、蟹の爪のやうな模様と云ふのであります。そこで是等の文様を陶磁の發達史的に即時代の上から見ると、文様の内容より見て幾何學的な文様。これは唐以前のものに多い。

動植物文様。宋明より出て居る。

道釋人物工物。清朝に多い。

斯う云ふ大體の徑路をとつて居るが、前時代のものは後の時代に殘つて、先になる程模様の數が多くなつて居る譯であります。

次に文様をその性質より考へる、即ち陶磁器の文様が何から出て居るかと云ふことを考へて見ましよう。

應用文様。これは他の工藝品からそつくり文様を借りて來たものを假りに名着けて見たのです。それは唐以前には、染織物、古銅器などの文様を借りて來て居るものが見受けられます。

陶器文様。宋から明になると、陶磁のみに見られる文様が出て参りました。是は一つの進歩を語るものでありまして、それを陶器文様と名けて見たのであります。繪畫文様。清朝になると、模様が模様、性質を失つて、模様ではありながら、實は陶磁器が一つの材料になつて、それに繪を畫いたものに過ぎないものが出て居る。之を繪畫文様と假りに名けて見ました。

次に、外邦との交渉に依る支那陶磁の文様と云ふことを考へて見れば

支那個有文様。漢から六朝唐へかけて支那個有の原始文様がありました。同時に古銅器の模様なども他の國にないやうな文様もあつた。尤も古銅器の文様と云ふものは最近の研究によると、實は支那人、漢民族或は蒙古民族、支那本土の民族の獨創ではなくして、それはもつと西の方のスキタイとかクリスタンとか色々の方面の民族の文様の影響が支那に及んで、それが支那化されてさうして古銅器の文様になつたと云ふ説がありますが、或はさうかも知れない。さうしますと、是は支那個有の文様でなくなるのであります。が、假りにさう呼んで見たのであります。

西域感化文様。六朝から唐宋にかけては西域との交通が漸繁になつて、その工藝品の文様の影響を受けたものが現れて居ります。

支那文様。宋から明になると、外國の影響を受けた文様が段々支那化されて、さうして

支那獨特の文様が陶磁の上に現れて來ました。

外國文様の感化。明朝から清朝にかけては直接外國との交通が開けて、西域ではなくして西洋及び日本の影響と云ふものが非常に現れて参りました。康熙年代には既に日本の伊萬里寫が出來て居る。和蘭寫も出來て居る。乾隆時代には西洋の油繪その儘の模様が出來て居ると云ふ風に、非常に廣く外國の影響を受けて居るのであります。

最後に甚だ概括的ではあります。支那陶磁の色と他の諸國との色を比較して見ます。唯今まで申しましたやうに、支那陶磁の色と云ふものは非常に複雑を極めて居る。支那の書物に出て居る程複雑かどうかと云ふことは問題であります。實物に就いて見ても非常に複雑なものである。諸外國の陶磁の色と比較して見て、寧ろ一步も二歩も進歩したものであり、諸外國の陶磁は東洋のものに倣つて居ることが明瞭である。それ程支那の陶磁の色は複雑且進歩したものであります。

更に陶磁器の文様の上から比較しますと既に申し上げましたやうに種々雑多の文様が取扱はれて居る。この文様の種類の多い上から見ましても、支那の陶磁器と云ふものは、逆も西洋の陶磁器の比ではない。この點は皆さんも御觀察になつたかと思ひますが、一昨年でありましたか、三越で諸外國の陶磁器の展覧會を致しました。是は三越で可なり力を入れまして、なるべくいいものなるべく廣く種類の變つたものを見せ様と云ふの

で蒐集致しました。私共の同好の方々が見に行かれました、批評はどうであつたかと云ふと、實に詰らなかつた、色にしても模様にしても單純で飽いて來る。考へて見ると東洋の陶器、殊に支那の陶器と云ふものは世界の陶磁器中矢張り第一のものであることが分つたと、異口同音に聞かされ、私自身の経験も亦さうでありました。

支那陶磁器と云ふものは色と模様に於て世界第一であるのみならず、古いと云ふことに於ても矢張り世界の中で支那の陶磁器程古いものはない。西洋で磁器が出来したのは十八世紀に獨逸のマイセンで出来ました。支那で磁器の出来したのは人に依つては唐の時代と申しますが、少くも宋の時代に於て即ち九世紀から十二世紀の間に於て立派な磁器が出来て居る。少くも五六百年前から立派なものが出来て居る。斯う云ふことを考へて見ると、支那の陶磁器東洋の陶磁器と云ふものは世界的なものであつて、外の國の及びも著かない過去を有つて居る、是だけは他に誇り得る一つの寶であると思ふのであります。

長いこと詰らないことを申し上げまして、甚だ恐縮でありましたが、大體支那の陶磁の色と模様と云ふことに就いて概括的な御話を申し上げたのであります。尙細かい點は展覽會や何かの機會に實物を御覧になると、私が申上げる迄もなく、皆さんが直接に御理解になることでありますから、申す必要はないと思ひます。(昭和七年十二月三日講演)

昭和九年六月四日印刷
昭和九年六月六日發行

【定價金貳拾五錢】

帝室博物館發行

印刷者 渡邊安雄
東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷所 民友社印刷所
東京市京橋區銀座西八丁目五番地

東京帝室博物館講演集既刊目録

第一册 (定價金五拾錢)

壁畫の盛衰
文化史より見たる西蜀
上下の起原及變遷
文學博士 瀧 精一
帝室博物館鑑査官 高 橋 健 自

第二册 (定價金貳拾五錢)

孔子の像に就いて
傳教大師と弘法大師
工學博士 塚 本 靖
文學博士 辻 善之助

第三册 (定價金五拾錢)

佛教美術に於ける印度と支那との關係
一切經刊行以前の一切經に就いて
文學博士 大 村 西 崖
高 楠 順 次 郎

第四册 (定價金五拾錢)

美術と服飾との關係に就いて
上古の服飾
奈良時代及平安前期の服飾
帝室博物館鑑査官 溝 口 禎 次 郎
文學博士 高 橋 健 自
同 關 根 正 直

第五册 (定價金參拾錢)

歐洲學者の東方探險
東洋最古代の女人畫に就いて
文學博士 瀧 精 一
同 松 本 亦 太 郎

第七册 (定價金貳拾五錢)

東洋畫に就いて
支那畫の二大潮流
中華民國特命全權公使 汪 榮 寶
文學博士 瀧 精 一
桃山時代障屏畫の陳列に就いて
帝室博物館鑑査官 溝 口 禎 次 郎
浮世草子を通じて見たる浮世繪
文學博士 笹 川 種 郎

第九册 (定價金貳拾五錢)

日本刀の造り方
古鏡の圖文に就いて

工學博士 依
帝室博物館學藝委員 原

國 一
田 淑 人

第十一册 (定價金五十五錢)

上古時代の住宅
埴輪に關する二三の考察

帝室博物館鑑査官 後
文學博士 濱

藤 守 一
田 耕 作

36H91

終